

VII-38

水辺の生活と生産の「ふるさと」づくり

西谷技術コンサルタント 正会員 佐々木茂樹

1 はじめに

鳥取県若桜町は、豊かな水と緑の山里に囲まれたロマンの生活が生産と共存している。

地域生活圏の住民は、生活周期の中で、快適性アメニティの高いコミュニティーエリアの創出を求めている。

その一つが、水辺の生活と生産の「ふるさと」づくりである。

本報文は、鳥取県東部にある一級河川千代川支川八東川若桜地区において行った治水・利水の歴史を踏まえ、水環境整備計画に取り組んだ実践例を整理したものである。

ー整備内容ー

- 1) 事業計画区域 $A=0.47\text{ha}$
- 2) 水路、樋門改修 $L=185.00\text{m}$ (親水護岸)
バイパス水路 $L=200.00\text{m}$ (生態保全工法)
 - 遊水施設……せせらき徒歩地、調整地、水生植物園、蜚等養殖流路、魚巢ブロック、草生小路等
- 3) 親水・景観保全施設
 - 修景施設……自然生態林、野鳥園、昆虫園、花木園、花草園等
- 4) 利活用、休養施設 (コミュニティー施設)
 - グルーピングエリア、サークルベンチ、休憩所、遊歩道、便所等
- 5) 管理利用施設
 - 管理道路、照明施設、駐車場、案内サイン、安全施設等

2 農村、田園、水の景観

農村空間は、単なる「眺」ではない。その地域の住民の生活・生産活動が、人間と自然環境に如何に関わってきたか、民俗史の永年の深さを原風景の中に、その心を発見することから始めることが必要と考える。

近年、水辺環境はアメニティ資源として認識され、河川整備に際しては、治水や利水を目的とした河川整備においても、河川の親水性や自然保護にも配慮した整備が要求されるようになってきた。

2-1 水景観形成の基本方策

一般のランドスケープ景観構成の諸要素の中でも、水の存在は重要なものであり、外部空間(アウトドア)においては、景観形成のキーワードとして、不可欠の要素である。それは、水が生物生態の根源であって、本能的に感觸度が高いからである。

人間社会、特に農村生活においては、絶対的な存在であることは確かであるのである。人の集まるところ生活するところ、更に生産することも、水辺アクアフロントに発生している。

地域生活圏の「人」も含めた生物生態の持続する歴史の永い「つきあい」は21世紀へと続く。このことは、地域コミュニティーの民俗史としても、永遠のものである。

水と遊び、水と暮らし、水を媒体とした生産は自然の輪回の中にすでに許されている行為として「第2の自然」を形成してきた。

水景観を策定するに当たっての基本方策として、このことを忘れてはならない。

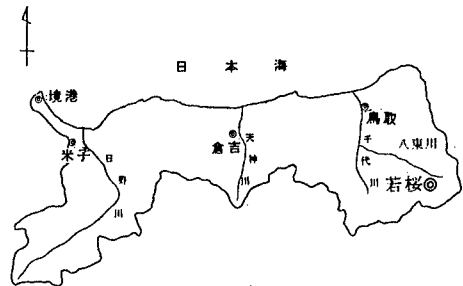


図-1 位置図

水を利用することは、水を汚してはならないことと同じ意義をもつ課題であると考える。

2-2 水生生物への対応方針

魚類と水生生物、清流と適度有機質流の対応として、図-2に示した水系統を考える。

3 農村公園としての性格特性

3-1 動線計画

園内の動線計画は歩行者優先とし、原則として許可車輛以外は車輛通行禁止とする。また園内の遊歩ルートは、そのままジョギングルートに活用する。

3-2 コミュニティエリア

コミュニティふれあい対策として、休憩をかねたグルーピングエリアをターゲット人数に相応する規模の施設を設ける。

例えば、サークルベンチ、野点茶会席、朝市広場、草すべりゲレンデ等を園内に配置する。

このことは、近隣住民同志のふれあい、同好会グループによる野外学習教室の活用、さらに屋外催物広場としても可能なスロープ（ステージ）の展開にも配慮しながら、ニーズの多様化に対応する。

3-3 照明施設と照度

照明施設は「ソーラシステム」の導入をはかることを原則とする。

照度は、グルーピングコーナー、トイレ等のコミュニティ施設周辺は50ルクス、納涼遊歩道、幹線水路沿いは20ルクス、防犯点へ5ルクスとする。

特に納涼ボタル沿川には、シーズンに対応するタイムセットを付加する。

4 問題点

4-1 トイレ施設の必要性

当該地域を取り囲む、公園的（コミュニティ・ピクニックネットワーク）施設の配置間隔について検討してみても、当該地に「トイレ」の必要性を認めざるを得ない。このため、トイレ施設の計画を行う。

4-2 駐車場の必要性

当計画区域内は、歩行者を優先した遊歩空間として、計画策定されたものであり、地区生活住民を利用主体として構成されており、日常生活周期の中での繰返し利用の中で、事業効果は十分に高いが、地域生活圏（徒歩圏外）住民に対しても、地域内のモデル的存在価値が高い。

このため、普通車（水路管理を含む）10台程度の駐車場を計画する。

4-3 ハスの必要性

「水環境」整備事業は、水辺の生活と生産の共存に依存することはもとより、水の中に生息する生物相関を可能にする環境を再現する。このためには、ハス・スイレン等による水生植物園を創出する。

5 おわりに

今後は、実際に水環境施設整備を行った事例をもとに、その手伝を再整備し、内容を充実させていきたいと考えている。

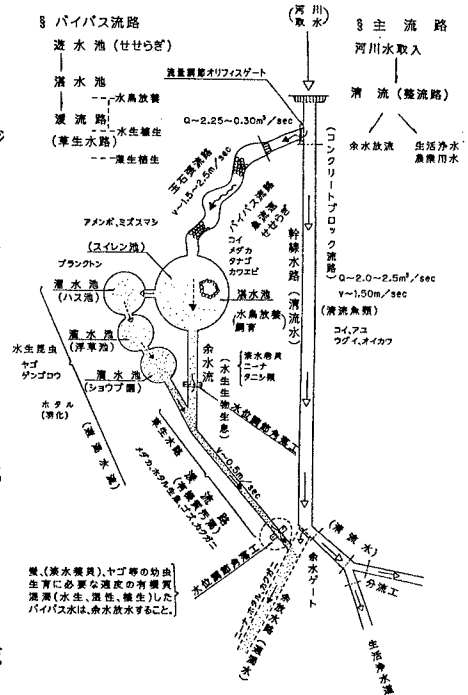


図-2 水性生態への対応方針